

カンボジアの3年間で学び得た経験値

前プノンペン日本人学校教諭

千葉県浦安市立日の出中学校教諭 石澤 広大

キーワード：カンボジア、在外教育施設、教務主任

赴任校の概要（2021年8月19日現在）

学校名・日本語：プノンペン日本人学校

学校名・現地表記 Japanese School of Phnom Penh

URL: <https://www.jspp-edu.cc/>

児童生徒数 小学部 39人 中学部 10人

1. はじめに

平成30年4月から3年間、カンボジアのプノンペン日本人学校に勤務した。1年目は中学部1年の担任、2年目は小学部5年の担任、そして3年目は教務主任として学校運営に携わることができた。日本とは異なる文化の中で生活し、多大な経験値を学び得ることができた。これらの経験を少しでも伝えられればと思い記録に残そうと考えた。

2. カンボジアについて

カンボジア王国、通称カンボジアは、東南アジアのインドシナ半島南部に位置する立憲君主制国家。ASEAN 加盟国、通貨はリエル、人口1,513万人、首都はプノンペン都。南はタイランド湾に面し、西はタイ、北はラオス、東はベトナムと国境を接する。国民の90%以上が、クメール語（カンボジア語）を話し、仏教（上座部仏教）を奉ずるクメール人（カンボジア人）である（Wikipediaより）。



修学旅行でも訪れたアンコールワット

3. プノンペン日本人学校について

(1) 概要

カンボジア日本人会のもと、カンボジアの首都プノンペンにおいて平成27年（2015年）に開校した日本人学校です。日本の文部科学省から在外教育施設として認定を受けている。かつ、カンボジアの教育・青年・スポーツ省からカンボジア国教育法に基づく学校としても認定を受けている。校舎はプノンペン都西部の、現在プノンペン補習授業校が土曜に開校されている校舎との共用となる。日本人学校として必要な教室を備えるべく、2階建てであった校舎を、3階建てに増築した。運動場は屋根付きの全天候型であり、体育館・講堂としても利用している。この学校は、カンボジアに在住する日本人子女または日本語での学びに支障のない外国人に対し、日本国憲法、教育基本法及び学校教育法の精神にもとづき、かつ文部科学省の定める学習指導要領を基準とし、初等及び中等普通教育を施すことを目的としている。これに加え、国際感覚を身に付け、国際社会で活躍できる児童生徒の育成を目指してグローバル教育を実践している（学校HP概要より）。

(2) プノンペン日本人学校の特色について

主な特色としては、3つのことが挙げられる。

1つ目は、少人数教育によるきめ細かな指導である。各学年とも多くても10人の児童生徒数になる。そこでは、一人ひとりの個性を生かし、各々に寄り添った指導を行うことができる。

2つ目は、異学年活動（通称スマイル班活動）である。小学部1年生から中学部3年生までの全学年を、縦割りの3班に分けて活動を行った。主に運動会や水泳大会の行事や日々の清掃活動での活動時にこの縦割り班で行った。この成果としては、低学年の児童は身近な存在の上級生を見て真似て学ぶ姿があり、上級生は「自身の行動が下級生の模範となる」という意識を高め、また下級生にやさしく接する姿を多く見る事ができた。

3つ目は、スピード感を持って教育活動が進められることである。例えば、プロ野球の埼玉西武ライオンズがカンボジアに野球の支援活動を行っており、その際にプロ野球選手の秋山翔吾選手が来校してくれることが1週間前に急遽決まったことがあった(2018年12月8日)。急な事にも、臨機応変に予定を変更し、子どもたちに野球教室を行うことができた。現在はアメリカのメジャーリーグに挑戦している秋山翔吾選手から指導を受ける機会は日本にいてもなかなかない素晴らしい機会となった。臨機応変に対応できることは少人数の良さであると感じている。

4. 教務主任としての仕事

3年目には教務主任をさせてもらったが、この2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響を受け、1年間の半分ほどはカンボジア政府による休校措置が取られた。そこで、プノンペン日本人学校はオンライン授業をいち早く行い、子どもたちの学びの保証を確保することができた。そこで、意識して行ったことがある。

① 校長先生、教頭先生との毎日の会議

コミュニケーションを取ることで相互理解につながり、毎日の何気ない会話から、様々な情報共有ができた。また、在外教育施設の特徴として職員の入れ替わりが早いので昨年や一昨年の出来事なども共有する事ができた。

② 週報による早め早めの職員への情報共有

先生たちに次週の予定を早めに伝える事により、予定変更や突発的なことに対応しやすくなる。また、2週間分を伝えることで見通しを持って仕事をしてもらえよう環境を作った。

③ 職員室の穏やかな雰囲気作り

職員の間関係は何より大切であると1年目に痛感した。そこで朝や休み時間、放課後には職員同士が世間話を気軽にできる人間関係を作れるよう自ら進んでコミュニケーションをとった。子どもの教育の事で真剣に話す場面も大事だが、日本全国から集まりカンボジアに住む仲間同士、些細な会話を楽しめる人間関係がより大事だと感じていた。

④ 不必要な会議の削除

教育課程編成会議や、領域部会、行事の反省会などをなくした。振り返りはたしかに大事だが、大切なのは今年を経験し、来年に提案するときにより良くすることと考えた。会議が減ったことにより、教員の負担や時間の拘束が減り余裕が生まれた。

⑤ 日本人学校の広報部長に

子どもは意外とみんなが学校の出来事を家で保護者に話すということではない。むしろ、学年が上がれば上がるほど思春期ということもあり、あまり話さなくなる。そこで保護者は、学校での様子をほぼ知らないと考えたほうがよいと考えた。そこで、Facebookで学校の様子を積極的に発信した。4月に写真掲載の承諾書を全児童生徒からとって、個人情報保護にも配慮した。カンボジアは、Facebookが重要な情報ツールだったので、多くの保護者やカンボジア在住の日本人に情報発信ができた。ホームページにも情報をアップしたが、SNSの方が反響が大

きかったと感じた。

5. プノンペン日本人学校の経験を通じて

プノンペン日本人学校では3年間勤務した。

1年目は、中学部1年生の担任として、まずは様々な事に慣れるのに必死だった。日本人学校独特の教育活動もそうだが、家族4人での赴任ということもあり生活基盤を整えるのも大切なことであった。生活が落ち着かなければ、仕事への影響も大きかった。気候や住まいや食事、移動手段、そして新たな人間関係など徐々に慣れていくことができた。

2年目は、小学部5年生の担任を受け持った。2年目にもなると、新しく赴任された先生への指導や支援を行う立場にもなり、時のすぎる速さを実感していた。その中で、カンボジア文化を学ぶ機会も増え、現地校との交流やプノンペン大学の学生との交流、クメール語の学習も行い、よりカンボジアを学ぶこともできた。発展途上国のカンボジアは、貧富の差もあり、衛生問題も山積みだ。けれど、カンボジア人は明るく陽気で笑顔が素敵な人が多い。もしかしたら、日本人より幸福度は高そうだなとも思った。

3年目は教務主任になり、学校運営に携わることができた。学校の特色を生かしながら、これまでの教員生活で得た知識や経験を加味して、教育課程を新たにしたり学校行事を精選したりして子どもたちにとってより有意義な教育活動になるよう努力した。

そこに加えて、新型コロナウイルスの影響により、カンボジア政府から休校措置がとられた。前代未聞の出来事だったが、校長先生の「ピンチをチャンスに!!」の合言葉の元に職員が一致団結しオンライン授業に取り組んだ。Zoom(Zoom Video Communications)を使つての対面授業の実施や、Google Classroomを使用しての課題の提出や保護者との連絡のやり取りなどを行い、子どもたちの学びの保証に全力を注いだ。

このカンボジアでの3年間で学んだことは、「コミュニケーションの大切さ」と「共生からの感謝の気持ち」である。

学校内でも日本全国各地から集まった教員は、価値観や教育方法など異なる部分も多かった。そこで自分の考えばかり押し通すのではなく、聞く耳を持ち互いに考えを伝え合うことが大事である。その中で合意形成を行い、子どもの成長のためにという共通の願いの元、教育を進めることができる。その前提にあるのが、互いの信頼関係である。その信頼関係は時間をかけさらに互いにコミュニケーションを取り合うことで培われていくことを実感した。

また、異国で生活することは本当に大変で、多くの人に助けてもらい「共に生きる」ことを実感した。日本人特有かもしれないが「おかげさま」「周りの人がいることで自分は生かされている」という事にも気づくことができた。

日本に戻り4ヶ月ほど経った今、目の前の子どもたちも先生方、保護者のほとんどが同じの日本人同士であるが一人ひとり違う多様な考えを持っていると、改めて気づかされた。世界中のどこにいても大事なことは一緒なのだと感じている。